

【親友と夫婦交換】騙されて巻き込まれた夫婦交換で、親友の夫から異常なほどの執着と執拗な愛撫を向けられ、快感のあまりメス堕ちしてしまいました。

サンプル（一部抜粋）

「や…だめ…っ…あ…あ…っ」

広いホテルの一室…。

二つのベッドが並んでいる。

少し離れたベッドで、私の親友が私の夫の肉棒を咥え、じゅぼじゅぼと音を鳴らしている…。

「くっ…は…あ…っ」

夫の荒い吐息が響く。

そしてこっちのベッドには私と親友の旦那さん…。

クリトリスを執拗にくちゅっ…くちゅっ…と舐められ、身体が熱い…。

どうしてこんな事に…？

私はただ昔と変わらず、親友と仲良しで居たかったのに。

夫との愛を大切に、大切に…守っていきたくったのに。

…

夫と私と親友は大学の時からの仲だ。

親友は明るくて美人で、ハッキリしているタイプのカッコいい女性。

気の弱い私はそんな親友が大好きで、自分にはないモノを持っている親友に憧れていて…一生仲良しで居たいと思っていた。

夫は穏やかで優しい人…。

社会人になった時に告白してくれて…付き合い出したんだったな…。

付き合っても私達は変わらず3人で仲良しだった。

私と遼が結婚したのは27歳の時。

2年後に親友も10歳年上の男性と結婚して…その時から家族ぐるみの付き合いになった。私達が31歳になった今も、何も変わっていない…はずだった。

なのにどうして…こんなことに…？

（中略）

受付に声をかけ、部屋へと向かう。

エレベーターを待つ間、夫は何度も貧乏ゆすりをしている。

普段は落ち着いている人なのに……。

違和感が積み重なっていくけれど、その正体はまだ分からない。

部屋に到着し、チャイムを鳴らすとすぐに愛華が出てきた。

「あ、美羽！久しぶり！」

愛華は明るく私にぎゅっと抱きついてくる。いつもと同じ愛華だ……。

「久しぶり。」

最近会ってなかったもんね。」

「うん！隆二も中にいるし、入って入って！」

愛華はそう言いながら私の手を引き、チラッと遠に目配せしていた。

「……？」

ボタンと背後でドアが閉まる。

「ねえ、愛華……」

「ん？」

「懸賞……応募したの？」

「え？」

一瞬愛華の顔がフリーズする。

「……？」

ただど次の瞬間には、ニコツと笑顔を作り

「そうそう、ラッキーだったんだよね。」

と言っていた。

何か…隠してる…？

サプライズとか…？誰かの記念日とか誕生日とかあったっけ…。

あ。そういえばもうすぐ私の誕生日だったな。一か月も先だけど。

もし誕生日に何かしようとしてくれるなら、変に勘ぐるのは良くないよね。

私は心の中で自分にそう言い聞かせ、

「そっか！誘ってくれてありがと。」

とニコツと微笑み返した。

手を引っ張られるままに入った広い室内…。白を基調とした、豪華な部屋が視界に入る。その中心のソファに座っているのは隆二さん。

私達よりも10歳年上だけど…カッコよくて渋くて落ち着いた男性。

「隆二さん、お久しぶりです。」

(中略)

少し酔いが回ってきて、ソファに座っていると、愛華が改まった感じで話し始めた。

「ねえ、そろそろ……」

「……？」

チラッと愛華の顔を見ると、隆二さんと遼と3人で目配せし合ってた。

「どうした…の？」

お酒のせいで頭がふわふわしてる。

ただそんな状態でも、遼の顔が異様に興奮しているのが分かる。

「遼……？」

小さく名前を呼ぶと、愛華が困ったように口を開いた。

「ほら、だから事前に言っておくべきだよって言ったのに。」

「俺だって言おうと思ったよ。」

思ってたけど……美羽は絶対に嫌がるだろうし……」

「まあ…そうなんだろうけど……。」

「とりあえず、もう始める？」

「…うん。」

愛華と遼が、私の分からない話をしていて…隆二さんはソファに深く座って、なんとも言えな

い表情で二人を見ていた。

愛華はゆっくりと遼の所へと移動し……ぴったりとくつつくように座っていて、その距離感は明らかにおかしかった。

「愛華……？」

クラクラする頭を手で押さえ、声をかける。

ただど次の瞬間、遼の手が愛華の肩へと伸び、抱き寄せるように愛華にキスを始めた。

「え……は……？」

ちゅっ……ちゅっ……と淫らな音を立て、遼の舌が愛華の口の中へとねじ込まれるのが分かる。

「まっ……て……何してるの……？」

（中略）

「ビクビクして可愛いね。美羽ちゃん。」

まるで甘やかすような、褒めるような声色。それを湿った耳元で囁かれ、

「あ……」

小さく吐息を漏らしてしまう。

隆二さんはそのまま舌を這わせ、私の首筋を舐め始める。

「ふ…あ…あっ…」

嫌だ。気持ち悪い…遼にされた事がないことを、次々と身体に教え込まれていく…。

それがどうしようもなく嫌なのに、拒絶したいのに…身体に力が入らない。

勝手に漏れていく声を我慢する事も出来ず、浅い呼吸を繰り返してしまう。

「ああああっっ♡♡♡」

「やっぱ、お前エロすぎ。」

「遼…もっと舐めてよ。」

「俺も愛華に舐めてほしいんだけど。」

「じゃあ舐め合いしよっか！」

「ん。」

向かいのソファからは愛華と遼の淫らな会話と声が聞こえてくる。

「っ……」

胸がずきつと痛む。

愛華みたいに…積極的なら良かったの…？

『愛華に舐めてほしい』って言葉が耳から離れない。

美羽に舐めてほしいなんて遼に言われた事がないから。私にテクニクがないから？経験が乏

しいから？ 遑しか知らないから……？

（中略）

「おまんこ、ぬるぬるだね。

ほら、聞こえる？」

くちゅっ♡ぐちゅっ♡ぬちゅっ♡

「あああ、あ、あ、音……や、だ……っ、そこ、変っ……」

隆二さんが指を動かす度に、淫らな音が響く。

浅い場所をぐちゅぐちゅと挟られ、身体の奥から何かが襲いかかるような、妙な感覚がする。

「……。

美羽ちゃん、汚しても大丈夫だからね。」

隆二さんはグチュグチュと指を動かしながら、優しくそう呟く。

その言葉の意味はまだ私には分からなかった。

ただど次の瞬間、隆二さんは反対の手でクリをくぱと剥いて、ごりごりと擦り始めた。

「んあああああ……や、だ……め、変だから、イぐ……イっっっっ♡♡♡♡♡」

頭が真っ白になって、視界が明滅する。

それと同時に身体が激しく痙攣し、ブシャツと激しい水音が響く……。

「ひ……あ……あ……、や……っ……」



何が起こったのか理解なんて出来ない。

ただ綺麗なベッドはぐちゃぐちゃに濡れて汚れていた。

「ごめ…ん…なさい…っ…」

「謝らなくていい。」

潮を吹いただけだし、全部俺のせいだから。」

隆二さんは優しくそう言うのと、もう一度中で指を動かし、クリを刺激し始める。

「ぐ、う、ああ、だめ、だめっ、また汚しちゃう…っ、から…っ…あああ…っっ♡♡♡♡♡」

1回潮を吹いたら…癖になるのかな。

分らないけれど、2回目はあるという間だった。

ブシャッ♡ブシャッ♡と簡単にベッドを汚していく。

「は…あ、あ…、きもちいい…よ…隆二さ…ん…っ」

「うん。」

隆二さんは愛おしそうに私を見つめながら、愛撫を続ける。

「ひ…ぎ…あああ…っっっ、気持ちいいよ…おお…っっ♡♡♡♡♡」

激しく潮が飛び散って、隆二さんの浴衣が汚れていく…。

「は…あ…っ、隆二…さん…っっ…」

「ん？」

「隆二さん…すごい…っ…。」

今までいったこともなかったのに……。隆二さんにされたら、全部気持ちよくなっちゃう…よ…。」

ヒクヒクと痙攣しながら、本音を垂れ流していく。

この人になら、何をされても気持ちいいんだと、度重なる絶頂でもう十分理解できた。遼とは…違うんだ…。

愛があるはずだった遼の愛撫ではイけなかったのに…。

どうしてなんだろう。

隆二さんの方が…愛されてると感じてしまうのは、どうして…？

「…煽っちゃだめだよって言ったのに。」

隆二さんは小さくため息をつき、帯をすつと外し床へと捨て…浴衣も何もかも手際よく捨てていく…。

（溺愛・執着愛撫の全容は製品版にて）